

熊阪台州編『永慕編』と『永慕後編』——「二十境詩」の比較を中心に——

壬生里巳

はじめに

江戸中期、福島の豪農であった熊阪台州が編纂した『永慕編』（天明八（一七八八）年刊）は、父霸陵を追慕するために綴った詩文集である。天明七年七月の台州の序文によれば、全国の諸氏に対し、熊阪家三代が地元の名勝地を詠じた「二十境図并詩」に寄せる詩を求め、「雄篇大作」を成そうという目的もあった。本書の諸本について、小林敬一氏の調査により、①舟木嘉助版本（天明八年版）、②伏黒本（寛政四年（一七九二）版）、③前川求版本（寛政十三年版）の三本あることが明らかとなった¹。天明八年に藻雅堂・須原屋（舟木）嘉助により刊行された版には、各地のすぐれた詩文を得て中下巻を為し「雄篇大作」とする計画があること、そのため「庚戌（寛政二年）」までに詩を送ってほしいと綴った台州の「再識」（天明八年正月二日）とともに、詩文の送付先や送付方法を事細かに指示する、藻雅堂 須原屋嘉助の「口上」を載せる²。しかし、台州が

期待するほど詩は集まらなかったようで、寛政二、三年と二度に渡り息子盤谷を江戸へ遣わし、諸氏と面会し詩文を集める活動が行われた（『戊亥遊囊』）。その時の交遊については、徳田武氏が「吾妻鏡補」と熊阪台州・盤谷」の中で詳細に考証している³。また①天明八年版では、台州の門人とおぼしき周俊・叔翰による「二十境図」を、②寛政四年版の伏黒本では、中国画から真景図の技法を学んでいた谷文晁の図に差し替えたことで、二十境図のありようは読者により明確に伝わるものとなった⁴。それでも、詩の集まりは芳しくなく、盤谷は寛政十二年にも江戸に赴いている（『南遊相載録』）。翌十三年によりやく崇文堂・前川六左衛門より『永慕編』が刊行された。③である。この奥付には「永慕後編^上 下二巻 嗣出」とあるが、刊行されたのは、享和四年（一八〇四）になってからであった。

ところで、熊阪家が命名した「二十境（高子二十境とも呼ばれる）」は、幕末にはすでに廃されてしまったが、近年、郷土の名所化の試みとして地元福島において「二十境」への関心は高まり、再発見された「二十境」

の景観をどのように保全してゆくかという活動も始まっている。^⑤特に、

小林敬一氏の一連の研究により、江戸末期にすでに廃された二十境の場所が推定され、「二十境図」の二種類の挿絵の構図が明らかになったことは、「二十境詩」の描く情景を理解のうえで大きな助けとなっている。^⑦

しかし『永慕編』所収の「二十境詩」の読解は、郷土史研究家らを含め、早くから着手されてきたものの、全国の諸氏から寄せられた「二十境詩」について取り上げられることはなかった。彼らは現地に赴くことなく、熊阪家三代の詩と挿絵だけで二十境に思いを馳せ、詩作している。台州は、全国の諸氏から寄せられた詩によって『永慕編』を完成させようとした意図を汲むならば、彼らが描く「二十境」にも着目する必要がある。そこで本稿では、「二十境」の中から「龍脊巖」「将帰阪」を例に、熊阪家三代の詩と諸氏の詩を比較し、二十境がどのようなイメージでとらえられたのかを考察していく。

一 熊阪家三代が描く「二十境詩」の世界

「二十境」とは、台州の父・霸陵が盛唐の詩人王維の「輞川荘二十景」に倣って、居所奥州伊達郡高子村（現在の福島県伊達市保原町）の景勝地を選び、次のように命名した場所である。^⑧

丹露盤、玉兔巖、長嘯嶺、龍脊巖、採芝崖、帰雲窟、将帰阪、狸首
岡、隠泉、高子陂、不羈坳、拾翠崖、返照原、走馬嶺、白鷺嶺、零
山、禹父山、愚公谷、白雲洞、古樵丘

台州は「永慕編序」（天明七年七月）の中でも「今にして之」（引用者注・

霸陵の「二十境詩」を誦すれば、調、盛唐に純ならずと雖も、平淡閑雅、亦以て摩詰（引用者注・王維）輞川之什に比するなり（原漢文。以下、同じ）」と記し、純粹な盛唐詩とは言えないものの、平淡閑雅な詩風は王維の輞川の詩歌に並ぶものであると宣言する。

ちなみに、熊阪家三代とは、霸陵・台州・盤谷のことである。熊阪家三代の詩の成立について、台州は、ある時、父の詩に和すように言われ、作詩したと述べている（台州「先考霸陵山人行状」『永慕編』所収）。霸陵が亡くなったのは明和元年（一七六四）、台州が二十六歳の時である。しかし、「白雲洞」の一節に「余将に老いんと欲す」とあるのようには、老年期の感慨を吐露する表現が見られる詩句があることから、『永慕編』刊行までに何度も推敲したことが推測される。^⑨また霸陵没後に生まれた盤谷は、父から祖父の偉業を聞かされ、『永慕編』を清書する際、二代の詩にさらに自身の詩を加えた（天明八年正月二日台州「再識」というが、二十歳前後の若者が、自分の判断で祖父や父の詩に和したというのは考えにくく、台州の勧めで詩を賦したと考えるのが妥当だろう。このようにして熊阪家三代の詩がそろったわけだが、「二十境詩」とは、どのような内容なのだろうか。まずは「龍脊巖」を取り上げる。^⑩この場所について、台州は「嶺（注・長嘯嶺）の西、纔かに巖の懸崖に属ける、蜿蜒として飛龍の背の如き者を、龍脊巖と為す」（「二十境記」とあるように、二十境の一つである長嘯嶺の西側、細く曲がりくねった、尾根伝いの道であったことが、周俊・叔翰図、文晁図ともにかがえる。

霸陵

峻巖不可行 峻巖 行くべからず

如立飛龍脊 飛龍の脊に立つが如し

欲踏浮雲進 浮雲を踏みて進まんと欲すれば
 天風生両腋 天風 両腋に生ず

台州

独歩峻巖巖 独歩す 峻巖の巖

孤筇凌紫煙 孤筇 紫煙を凌ぐ

忽疑立龍脊 忽ち疑ふ 龍脊に立つかと

却憶葛陂仙 却つて憶ふ 葛陂の仙

盤谷

独坐龍巖上 独坐す 龍巖の上

欲学駕龍人 駕龍の人を学ばんと欲す

翠標如出脊 翠標 脊を出すが如く

青苔似振鱗 青苔 鱗を振ふに似たり

まず霸陵詩の起句「峻巖」は険しい岩山を指す。険しい岩山を登っていくと、まるで空を飛ぶ龍の背中に立っているかのようだという壮大な見立てで始まり、思考の上では神仏世界の住人となって駆け回る姿が描かれる。

これを受けた台州は、葛洪『神仙伝』に登場する費長房の故事を使って霸陵の詩の世界をより具体的なものとする。費長房が仙翁の壺公からもらった一本の杖を葛陂に投じると、龍となったことから、峻しい岩山も登っていくと、自分も費長房のようにわずか一本の杖で、紫色の雲を掻き分け、空高く飛ぶ龍の背中に乗っているようだと思わせる。ちなみに、「紫煙」は、郭璞「遊仙詩」其三に「赤松は上遊に臨み、鴻に駕し紫煙に乗る」などと神仙世界を想起させる語である。

続く盤谷は、「では、私は仙人から学ぼうではないか。ちようどここ

は龍の背中なのだから」と答えるのである。転句の「翠標」は、生い茂る緑の木々を指す。小林氏は、後半の「翠標」「青苔」は現実世界の描写であるとし、「前半では仙人になりたいと言いながら、やはり仙人気分になりきれない盤谷のさめたまなざしと、霸陵、台州との世代的隔たりを感じさせる」と解釈する¹²⁾。しかし、盤谷がこの場所の自然がいかに龍の背鰭や鱗のように見えるかと説いたことは、龍の背中にいるという見立てを補強する効果があり、ここも霸陵・台州と同じく神仏世界に遊ぶ詩ととらえたい。

熊阪家三代の描く「龍脊巖」は、実際の風景というよりも中国古典を踏まえた空想の世界である。その中では、霸陵の「飛龍の脊に立つが如し」という見立てを共有し、そこから台州は費長房の故事を引いて神仏世界へと導き、盤谷はいかにこの土地が龍の背中に見えるかを描写する。このように霸陵の詩の見出した世界を台州・盤谷がそれぞれ補完する形で成立している¹³⁾。

続いて、もう一首「将帰阪」を見てみよう。「二十境詩」の題注によれば、霸陵が訪ねて来た客を見送ったり、葬列を送ったりしたことから名づけられたという。二十境の一つである帰雲窟の西に位置する林の中を通り、熊阪家の墓地のすぐ南西を箱崎へ抜ける小道で、明治以降の資料では赤坂と記す¹⁴⁾。

霸陵

独往将帰阪 独往す 将帰阪

斜陽射乱山 斜陽 乱山を射る

村童沽酒去 村童 酒を沽ひ去り

野老荷鋏還 野老 鋏を荷ひて還る

台州

相送将帰阪 相い送る 将帰阪

況逢揺落時 況んや 揺落の時に逢ふをや

未擬江淹賦 未だ江淹が賦に擬せず

先成宋玉悲 先づ宋玉が悲しみを成す

盤谷

林下独徘徊 林下 独り徘徊すれば

清風已向晚 清風 已に晩に向かはんとす

鳥還欲落巢 鳥は還る 巢に落ちんと欲し

人行将帰阪 人は行く 将帰阪

覇陵の詩の起句「独往」は唯一人で行く、という意味。裴迪「鹿柴」に「日夕 寒山を見ては／便ち独往の客と為る」(『輞川集』)とある。

夕方、覇陵が客を見送った帰りであろうか、一人帰る彼の傍を、酒を買った村の子供、鋏を担いだ農夫がそれぞれ帰って行く場面を描いたもので、「将に帰らんとする阪」という地名に因んだ詠みぶりである。

続く台州の詩の承句「揺落」は、秋、草木が枯れて葉が落ちること。「蕭瑟たり 草木揺落して変衰す」(『楚辞』「九弁」)とある。転句「江淹が賦」は、江淹の「別賦」(『文選』)、結句「宋玉が悲しみ」は、宋玉の「九弁」を指す。ここでは、友との別れを、秋という季節の持つ寂寥感によつて、一層辛いものだと述べたうえで、江淹の「別賦」のようにには詠めな

いが、行く秋を惜しんだ宋玉の「九弁」のような悲しみを表現しようという。ところで、「九弁」は、次のように始まる。

非哉秋之為氣成 悲しいかな 秋の氣為るや

蕭瑟兮 草木揺落而変衰 蕭瑟たり 草木揺落して変衰す

憶慄兮 若在遠行 憶慄たり 遠行に在りて

登山臨水兮 送将帰 山に登り水に臨み 将に帰らんとする

を送るが若し

「九弁」は、行く秋の悲しさから見知らぬ土地に放逐された屈原が味わったやるせない気持ちを表現した賦である。台州は鄙の地で一生を終えた父とその地に留まる自分の姿を重ね合わせ、「九弁」の诗情への共感を表している。なお、この地名が「山に登り水に臨み 将に帰らんとするを送るが若し」に由来したことを示す役割もあつたか。

一方、盤谷の詩は、覇陵詩と内容的に対になるような形で構成されている点に注目できる。起句はただ一人で歩いているという状況、承句は日が暮れていく情景、転・結句の「将に帰らんとす」る対象に焦点を当てる。ただ、覇陵が集落を舞台にしたのに対し、盤谷は遠い林の中へ場面を移し、目の前で巢に帰ろうとする鳥と、遠く離れた将帰阪で人々が帰っていくという遠近の景色を対比させたことで、詩に絵画的な広がりを持たせている。

「将帰阪」の詩では、地名にちなみ「将に帰らんとす」る行為をいかに描き出すかという点に重きが置かれ、それによって三代の詩に一貫性を持たせている。ただ、覇陵と盤谷が田園風景を描くのに対し、台州は中国の古典の指摘に留まるように見えるが、その地名の由来となった詩を暗示させた点に工夫が見られる。

以上、「龍脊巖」「将帰阪」の二詩では、台州や盤谷は、覇陵が見出した詩の世界を踏襲しつつ、新たな視点や発想で発展させるように描いて

いることを確認できた。また、「将帰阪」における霸陵と盤谷は、実景を思わせる詠みぶりであったが、熊阪家の詩は概ね観念的な世界を描くことが多く、特に台州は、中国古典を自家葉籠中の物として自由に詠み込んでいる。そこには、熊阪家、特に台州が若い頃より信奉している、古文辞学派の詩風の影響が関係すると思われる。盛唐の雄大華麗な詩風を重んじ、日常生活の中で抑圧された自己を中国の漢詩文の表現を用いて解放するという行為は、郷里福島に留まり続けた台州にとって慰めとなり、その詩風は生涯変わらなかつたのである。

二 諸国の諸氏の描く「二十境」

台州の求めに応じた、諸国の諸氏が詠じた「二十境詩」は、『永慕後編』上巻（享和四（一八〇四）年刊）にまとめられ出版された。諸氏の一覧は、巻頭の「永慕後編詩人姓氏爵里」に示されているが、唐橋公、西洞院公、綾小路公ら公卿をはじめ、忍藩・阿部正識、伊勢長島藩・増山正賢といった大名、赤松滄州、山根泰徳ら儒官、台州の旧友・大田南畝とその門人たち、総勢六十七名に及ぶ。

ここでは、先に取り上げた「龍脊巖」「将帰阪」がどのように諸氏によって詠じられたのかを見ていく。

「龍脊巖」は、霸陵詩における「飛龍の脊に立つが如し」という世界を踏襲する形で、諸氏たちも「在天 飛龍の脊」（錦水公子）、「借問す此の龍脊／飛龍駕すことを得るやざんや」（山根泰徳）、「宛として飛龍に駕するに似たり」（中島雪楼）と、地名にちなんだ表現が頻出する。さらに、次のように描く詩もある。

孤巖數十丈 孤巖 数十丈

欲進倚孤筇 進まんと欲して 孤筇に倚る

決策登危脊 策を決して 危脊に登れば

恍惚似乘龍 恍惚として 龍に乗ずるに似たり

（松崎蘭畹「寄題海左園二十境^{并引}／龍脊巖」）

巖似驪龍睡 巖は 驪龍の睡るに似たり

峻嶂半露脊 峻嶂として半ば脊を露はす

欲探領下珠 領下の珠を探さんと欲すれば

髻鬣拂人腋 髻鬣 人腋を払ふ

（金谷玉川「牛門小集分賦海左園二十境用霸陵翁韻／龍脊巖」）

一首目の松崎蘭畹（名は章、字は子賚）は薩摩藩の臣で、僻地にあつて交わりが少なかつたため寛政二年の締切を見過ごしていたが、寛政十（一七九八）年に初めて『永慕編』を読み、感激のあまり二十首を詠じたという（「寄題海左園二十境^{并引}」）。一つの岩が数十丈もある道を、杖を頼りに険しい山道を進んでいけば、気がつくくと、龍に乗っているようだ、という。転句「危脊」は危険な高い山の嶺のこと。

二首目の金谷玉川は、紀伊和歌山藩に仕えた儒者で、台州と同じく松崎観海に学んだ人である。寛政二年に、大田南畝らとともに霸陵の韻を用いて「二十境」詩を詠じたうちの一首である。起句の「驪龍」とは黒龍のこと。承句「峻嶂」は、高く険しい山々が連なっているさまを表す。転句は、龍のあごにあるという珠を探るためには危険が伴うという故事（『莊子』列禦寇篇）を踏まえる。結句「髻鬣」は、せびれの意。岩を眠っている龍、その背中に見立て、龍のあごにある玉を手に入れるかのように、この場所がいかに危険な場所であることを示す。

以上のように諸氏が詠んだ「龍脊巖」詩では、霸陵の（仙人のように龍の背に乗っているようだ）という詩の世界を踏まえたうえで、龍の背中であれば、どれほど危険であるかと想像を膨らませ、「危脊」（松崎蘭腕）、「峻嶒」（金谷玉川）、「巖高して何ぞ峻絶たる」（有馬白嶼）、「危巖攀つべからず」（樺島公礼）と描写する。地名ゆえに描かれる情景は限られてしまうが、いかにこの場所が龍の背中に似ているか、またどのように故事を転用するかが、詩人たちの腕の見せ所であったのだろう。続いて、「将帰阪」を見ていく。「将に帰らんとす」という情景は、諸氏たちの目にどのように映ったのだろうか。

山翁採薪罷 山翁 薪を採り罷めて

峻阪独将帰 峻阪 独り将に帰らんとす

帰路秋天暮 帰路 秋天暮る

月光射短衣 月光 短衣を射る

（唐橋公・菅原在経「寄題海左園二十境分題／将帰阪」）

山屋隔塵世 山屋 塵世を隔つ

羊腸自嶮巖 羊腸自ら嶮巖

奚疑帰路速 奚ぞ疑はん 帰路の速かることを

不似去時遅 去時の遅きに似ず

（山根泰徳「寄題海左園二十境／将帰阪」）

将帰峻阪遥 将に帰らんとするに峻阪遥かなり

独往避喧囂 独往 喧囂を避く

不擬窮途哭 窮途の哭に擬せず

高歌伴采樵 高歌して采樵を伴ふ

（古山政礼「寄題海左園二十境分題／将帰阪」）

一首目の唐澤公とは、「永嘉後編詩人姓氏爵里」によれば「従四位上侍従菅原在経」とある。日暮れに農夫が帰っていく場面である。承句「峻阪」は険しい坂道のこと。転句「秋天」は、台州詩の「況んや 揺落の時に逢ふをや」という秋という設定を踏まえる。結句「月光 短衣を射る」は、霸陵詩の承句「斜陽 乱山を射る」と夕方の場面を夜へと移行させている。

二首目の山根泰徳は、長門萩藩の儒者。起句「山屋」は、山の中にある家のこと。「塵世」は、穢れた世の中。隠者のように世俗から切り離れた場であることを表す。承句「羊腸」は曲がりくねったものを表す。「嶮巖」は危なくて険しいさま。転句で「帰路の速かるを」との関連から、結句「去時の遅きに似ず」とは、往路は上り坂のために時間がかったことを表す。

三首目の古山政礼は、「永嘉後編詩人姓氏爵里」に「字子文、東都士人」とある。承句「独往」は、霸陵詩の初句にも「独往す 将帰阪」とある。「喧囂」は、かまびすしいさま。転句「窮途の哭」は、『晋書』阮籍伝による故事で困窮の境遇や士官の道を得ないことを表す。結句「采樵」は薪を採る人のこと。ここでは、やかましい俗世間から離れ、無為に士官を求めたりせず、日々必要な薪を採りながら生活を謳歌する人の姿が描かれているが、引いては熊阪家の生き方を賞賛したものであろう。

さて、この三首の詩では、「将帰」「帰路」という語によって、熊阪家の詩と同様、地名を一つの〈型〉として詠み込んでいる。しかし、霸陵と盤谷の描いた、のどかな田園風景とは異なり、三氏の詩では「峻阪」、「羊腸自ら嶮巖」と阪の厳しさが描かれていた。他にも「峻阪遠山の曲」（有馬白嶼）、「羊腸一阪を経」（中島雪楼）とある。ちなみに、文晁画で

- ではないか」とし、文晁は遠近表現法を取り入れ、「少なくとも3箇所は実地でのスケッチに基づきながら描き直したが、他の多くは、詩を読み、周俊・叔翰画を見て、そこから喚起された景観像を描いた」と指摘する。なお、谷文晁と熊阪家との関わりについては、森銃三氏「谷文晁伝の研究」『森銃三著作集』第三卷、中央公論社、一九七一年、磯崎康彦氏「谷文晁論 二、―谷文晁、高子二十境を描く―」『人間発達文化学類論集』二二号、二〇一五年六月などを参照。
- (5) 小林氏(注1) 書に同じ。松浦丹次郎氏「ふくしま伊達の名勝 高子二十境」高子熊坂家と白雲館文学(土龍舎、二〇一二年)。
- (6) 小林敬一氏「名勝の景観『高子二十境』のイメージについて」スケッチマップ調査を通じてみる理解と理解を阻むもの」『日本建築学会計画系論文集』第六五八号、二〇一〇年 参照。
- (7) 小林氏(注4) 論文に同じ。
- (8) 磯崎氏(注4) 論文によれば、王維の二十景は植物名が多いのに対し、『水暮編』二十境は動物名が多いという違いはあるものの、「家屋のある情景、丘山の情景、泉景や湖景、園景、柴の情景、堤や坂道の情景などにおいてほぼ共通している」と指摘する。
- (9) 菅野宏氏「白雲館二十境雑記」『芸文福島』一号、一九八〇年五月に指摘あり。
- (10) 現在でも、福島県伊達市保原町には「龍脊巖」という地名が残る。
- (11) 小林氏(注1) 書、一〇六頁。
- (12) 熊阪家三代の「唱和」として扱われることも多いが、「龍脊巖」での押韻は、霸陵詩は入声陌韻(脊・腋)であるが、台州詩は下声先韻(烟・仙)、盤谷詩は上平声真韻(人・鱗)を用いている。この点で厳密な意味での唱和とは言えないが、内容的には、それぞれの詩句を意識した構成となっている。
- (13) 松浦氏(注5) 書に同じ。
- (14) 田中道雄氏「郊外散策の流行―新しい場としての自然」『蕉風復興運動と燕村』岩波書店、二〇〇〇年(初出『江戸文学』三号、ペリかん社、一九九〇年六月) など参照。